【日本―スペイン】前半、先制ＦＫを決める藤野＝ナント（ゲッティ＝共同）

―サモアに7―42で大敗―イルランドを下した。―の顔合わせとなった。―ない。

―3敗でトップ。

人生100年 健やかに生きる

～体育・スポーツとともに～ (31)

NPO法人 ならスポーツクラブ理事長
北 良夫（92）

スポーツマンシップに思う

記憶に残る3つの「F」

6月15日、恒例の奈良県スポーツ協会が主催するスポーツ指導者研修会が橿原市で開催されて、県内所属のスポーツ指導者約200人が参加して学んだ。今年のタイトルは「スポーツマンシップについて考える」であった。講師に招かれたのは、日本スポーツマンシップ協会会長の中村聡宏氏。スポーツマンシップの用語は、スポーツ大会開会式の選手宣誓などで、よく使用される言葉であり、よく知られているが、その内容を具体的に説明できる人は少ない。

講師は、スポーツマンシップはスポーツに関わる人が、心得として持つべき「尊重、勇気、覚悟」のことだと、具体的な事例で説明された。

聴講しながら私はおよそ70年前、1956（昭和31）年に誘われて、大阪ロイヤルホテルで開催されたスポーツ講演会に参加した時のことを思い出した。

講師は東京都知事で、日本体育協会（現スポーツ協会）会長の東竜太郎氏、話題はスポーツする人の心構えなど、多岐にわたっての話だったと思うが、記憶に残ったのはスポーツする人には、身に付けるべき3つの「F」すなわち「ファイテングスピリット」「フェアプレー」「フレンドシップ」があり、これを「スポーツマンシップ」と呼んで、スポーツマンには心にとどめて置くべき大切なものだという話だった。この言葉はその後歩んだスポーツ人生の羅針盤ともいうべきものになった。

教員になって1年にも満たない私がこの講演会になぜ誘われたのか。誘った人は当時の奈良陸上競技協会会長の藤枝昭英氏であった。若輩の私に何ゆえ声がかかったのか、理解できないままの参加であったが、講演を聴いて納得した。

56年1月、新任教員として勤務していた奈良市立済美小学校が全焼する事故に遭遇した。一カ月後の2月に開催される、第9回国体冬季大会（現国スポ）スキー（クロスカントリー）の県代表に決まっていたが、やむなく辞退を届けた。大会には代わりの選手が私の名前を変更しないまま出場していた。この選手が、競技の途中でスキー板が折れて、片足で完走したことが、美談となって全国の夕刊に掲載された。ところが翌日の朝刊には「昨日の美談は替え玉」と報じられて物議を呼んだ。

こんな事件があって半年後の秋、私は全国勤労者陸上競技大会の県予選会において好記録で優勝、全国大会での活躍が期待されていたにもかかわらず、県選手団から除外された。理由は冬季国体の替え玉事件に関わったためだった。むしろ被害者の立場にあるものに、こんな理不尽なことがあるのかと、関係者に訴えたが全く相手にしてもらえず、これがスポーツだといわれて、とりつく島もなく泣き寝入りとなった。

そして年が暮れる年末に開催された講演会に誘われた。この誘いは全国陸上競技大会に出場ができなかったことへの、会長の心づくしであったことに後で気付いた。

この一連の経験は、私のスポーツ人生のモットーとして持ち続けて今もあることを、振り返る機会となった今年の講演会であった。

＝第4土曜日掲載＝

スポーツマンシップについて講演があったスポーツ指導者研修会＝6月15日、橿原市